

日本語における形容詞アクセントの実態調査

— 地方出身者の発音を中心に — *

李 香 蘭**

目 次

1. はじめに
 2. 研究対象と研究方法
 - 2.1 インフォーマント
 - 2.2 調査の手順
 3. 調査結果及び要因分析
 - 3.1 形容詞アクセントの規則
 - 3.2 活用形別結果と要因分析
 - 3.3 年齢別変化した語の内訳
 4. おわりに
-

1. はじめに

日本語の変化は文法の面ばかりでなく、アクセントにおいてもあらわれ、例えば電車「デンシャ①」が「デンシャ②」、彼氏「カレシ①」が「カレシ②」、「オーディオ①」が「オーディオ②」のように、特に平板化現象を指摘している論考が、拙稿(1996、2000)をはじめ、秋永(2002)、陣内(1997)、佐藤(1990)、最上(1984、1987)など、少なくない。

このようなアクセントの平板化は日本語全体に現われる現象であるかどうか、日ごろ疑問に思ってきたが、本人(2004)の発表したもの「東京語における形容詞アクセントの変化」では、形容詞アクセントが若い人を中心に終止形と基本型(単獨で讀んだ場合)で使われた場合は、逆平板化¹⁾、すなわち起伏型への変化が目立っていた。例えば、「このくつアカイ

* 이 논문은 2003년도 圓光大學校 교내 연구비 지원에 의해 研究되었음.

** 圓光大學校 사범대 일어교육과 副教授 日本語音聲教育・音韻論 専攻

1) 平板化は平板型でないアクセントが平板型に進んでいる語(ゆれのある語)も含めて、完全に平板型になったものを意味するが、逆平板化というのはゆれのある語を含めて平板型の語が起伏型へ移りつつあるものを指している。

ね②」が「このくつアカイね②」に中高型へ変化したことである。もう一つの結果としては起伏型形容詞の活用形(～く、～ケレバなど)において、例えば「サムク(寒く)なる①」が「サムクなる②」など、アクセント核が1拍後ろにずれる現象などがあげられる。このような傾向は、アナウンサーの発音やテキストのテープの発音においてはまだ起こらず、どこまでも一般の自然な会話の中で現われる現象ではないかと考えられる。

ところで、このような形容詞アクセントの変化は、東京出身者に限る現象なのかそれとも全国的現象であるかはいまだに明らかになっていない。そこで、今回はインフォーマントを東京出身者以外の人を選定して形容詞アクセントの変化の実態を把握するとともに変化の要因を究明することを試みた。それから前回発表した東京出身者のアクセントと比較しながら、述べることにする。

2. 研究対象と研究方法

2.1 インフォーマント

さて、日本語における形容詞アクセントの変化の実態を調査するにあたって、前回に発表したものは東京出身の男女14名を調査の対象としたが、今回は出身地が首都圏²⁾以外の人である地方出身12名をインフォーマントとした。インフォーマントの条件は、各該地域で生まれ高校まで卒業した者として現在は東京に住んでいないことを前提に、その他は特に設けなかった。その内訳は次の通りである。

[表0] インフォーマントの内訳

一連番号	出身地	性別	年齢	職業
D1	静岡県 (中部地方)	女	20才	学生
D2	富山県 (中部地方)	女	21才	学生
D3	大阪府 (近畿地方)	男	22才	学生
D4	愛知県 (中部地方)	女	22才	学生
D5	埼玉県 (関東地方)	男	25才	大学院生
D6	群馬県 (関東地方)	女	28才	先生
D7	佐賀県 (九州地方)	女	30才	学生
D8	鳥取県 (中国地方)	女	38才	学生

2) 埼玉県の一部は首都圏に入る地域であるが、D5のインフォーマントの出身地は埼玉県と群馬縣との縣境にある深谷市で、首都圏には入らない地域である。

一連番号	出身地	性別	年齢	職業
D9	福島縣（東北地方）	男	45才	公務員
D10	北海道（北海道地方）	男	45才	先生
D11	宮城縣（東北地方）	女	49才	會社員
D12	大阪府（近畿地方）	男	49才	先生

2.2 調査の手順

調査の項目や手順は前回³⁾と同一な方法を採用した。平板型の「赤い、おいしい」2語と起伏型の「寒い、青い、大きい」3語を各々活用形6つを対応させた30例を持ち、自然な會話体の文を作り、出来るだけ日常生活の中で使われているアクセントで發話してもらうように試みた。更にデータの正確性や個人の中に2つ以上のアクセント型がある場合もあるので、これらの文を5回ずつ反復して作った150個の文をランダム形式にして、發聲するようにした。5回分の發音の中で3回以上同じアクセントが出た場合、有効なアクセントとして扱うことにした⁴⁾。次に調査項目の例をあげる。

<調査項目>

アカイ（赤い） 0

- | | |
|----------------------------------|----------------------------------|
| 1) このりんご <u>す</u> ごく <u>赤</u> いね | 2) これ <u>赤</u> いく <u>つ</u> じゃない？ |
| 3) ちょっと <u>赤</u> くなりましたね | 4) このセーター <u>赤</u> くて着れませんね |
| 5) もうちょっと <u>赤</u> ければいいのに… | 6) ちょっと前まで <u>赤</u> かったのに… |

オイシー（おいしい） 0

- | | |
|------------------------------------|--|
| 1) このりんご <u>す</u> ごく <u>お</u> いしいね | 2) これ <u>お</u> いし <u>い</u> りんごじゃない？ |
| 3) ちょっと <u>お</u> いしくなりましたね | 4) このりんご <u>お</u> いしく <u>て</u> やめれませんね |
| 5) もうちょっと <u>お</u> いしければいいのに… | 6) ちょっと前まで <u>お</u> いしかったのに… |

サムイ（寒い） -2

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1) ここは <u>す</u> ごく <u>寒</u> いね | 2) ここは <u>寒</u> いところじゃない？ |
| 3) ちょっと <u>寒</u> くなりましたね | 4) このセーター <u>寒</u> くて着れませんね |
| 5) もうちょっと <u>寒</u> ければいいのに… | 6) ちょっと前まで <u>寒</u> かったのに… |

3) 本人(2004)「東京語における形容詞アクセントの変化」という題で発表したもの。

4) 個人のアクセントの中でゆれのある場合、最大2つのアクセントは見られたが、それ以上は現れなかった。5回の發音の中で4回は同じアクセント型が得られた。ゆれのある場合にもそのアクセントは表記したが、多数型アクセントだけ有効なものとして扱うことにした。

アオイ (青い) -2

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1) このりんご <u>す</u> ごく青いね | 2) これ青いりんごじゃない？ |
| 3) ちょっと <u>青</u> くなりましたね | 4) このセーター <u>青</u> くて着れませんね |
| 5) もうちょっと <u>青</u> ければいいのに… | 6) ちょっと前まで <u>赤</u> かったのに… |

オーキー (大きい) -2

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1) このりんご <u>大</u> きいね | 2) これ <u>大</u> きいりんごじゃない？ |
| 3) ちょっと <u>大</u> きくなりましたね | 4) このセーター <u>大</u> きくて着れませんね |
| 5) もうちょっと <u>大</u> きければいいのに… | 6) ちょっと前まで <u>大</u> きかったのに… |

3. 調査結果及び要因分析

3.1 形容詞アクセントの規則

基本形は動詞と同様に平板型(0型)でなければ起伏型(-25)型であるが、0形容詞は「赤い、厚い、遅い、おいしい」など約10%(田代 1988 参照)しかなく残りは「寒い、青い、辛い、寂しい」など-2型(以下-2にする)である。形容詞は各々の活用形によって次の例のようにアクセントが変わる。

(濃く示されたところはアクセント核のある拍である。)

平板型 (赤い)	アカイ	アカイクツ	アカクナル	アカクテ	アカケレバ
	アカカッタ	アカカロウ	アカイカ	アカイデス	アカサ
起伏型 (寒い)	サムイ	サムイトコロ	サムクナル	サムクテ	サムケレバ
	サムカッタ	サムカロウ	サムイカ	サムイデス	サムサ

0形容詞は「赤い」の例に、-2形容詞は「寒い」の例と同一なアクセントとなるが、「大きい、多い、小さい、酸っぱい、低い、深い」⁶⁾などは音韻構造上、別な形で変わる。

3.2 活用形別結果と要因分析

アクセントの規則のところで見えてきたように、形容詞はその活用形によってアクセントが変わる。そこで、ここでは「終止形・連体形・～ク・～クテ・～ケレバ・～カッタ」など

5) 後ろから2拍目にアクセント核がある型で、起伏型の場合、後ろから数える方法をとることにする。

6) 「大きい、多い、小さい」は「オーキク、オーク、チーサク」の場合は、全部頭高型で発音されるが、「すっぱい、低い、深い」は「スツパク、ヒクク、フカク」のように-2型に発音される。

6つの活用形に分けて調査した結果を持ち、それを分析・検討し、アクセントの変化した要因を考察してみる。それから、これを前回は発表したもの(東京出身のアクセント)と比較しながら述べることにする。

まず、基本型として單獨で讀んだ場合は終止形と全く同一な結果が得られたので、單獨の場合は終止形と同様にみていい。馬瀬・佐藤(1985)『東京語アクセント資料』では、例えば基本形の「赤い」の場合は0が14/19名、-2が5/19名、「おいしい」は0が10/19名、-2が9/19名であらわれ、今回調査した基本型・終止形とのデータとは大きな差が出ている。これは『東京語アクセント資料』が約20年前の資料であるため、起伏型の動きが現在より鈍かったことを示すものではないかと思われる。

3.2.1 終止形アクセント

[表1] 終止形アクセントの内訳

	アカイ (0)*	オイシー (0)	サムイ (-2)	アオイ (-2)	オーキー (-2)	
D1	0/0	-2	-2	-2	-2	
D2	-2	-2	-2	-2	-2	
D3	-2	-2	-2	-2	-2	
D4	-2	-2	-2	-2	-2	
D5	-2	-2	-2	-2	-2	
D6	-2	-2	-2	-2	-2	
D7	-2	-2	-2	-2	-2	
D8	-2	-2	-2	-2	-2	
D9	-2	-2	-2	-2	-2	
D10	-2	-2	-2	-2	-2	
D11	-2	-2	-2	-2	-2	
D12★	-3/-3	-2	-3/-3	-2	-4/-4	
計	地方 (12名)	0(1)-2(10) -3(1)	-2(12)	-2(11) -3(1)	-2(12)	-2(11) -4(1)
	東京 (14名)	0(1) -2(13)	0(2) -2(12)	-2(14)	-2(14)	-2(14)

* 調査語の下にある()の中は東京(共通語)アクセントである。(以下同じ)

まず、「このりんごすごく赤いね」の例文のように終止形として使われた場合には[表1]のように、起伏型の「寒い、青い、大きい」はD12を除けば全員、規則通り発音されている。ただ、D12は40代の大阪出身であるだけ、大阪アクセントである頭高型があらわれたのが東京出身のアクセントとは異なる点である。平板型の「赤い、おいしい」は東京出身のアクセントと同様に0で発音された人は「赤い」でわずか1名しかおらず、残りの人は規則からはずれた型であらわれた。このことは平板型の起伏型への変化を意味する。

このように、大きな変化が起ったのは、前回、発表したものにも取り上げたように形容詞は平板型の所屬語数は少なく、起伏型が圧倒的に多いということがその変化の要因とな

ったのではないか。つまり、多数形アクセントへの統合（勢力の移り変わり）によることであろう。秋永(2002)でも多数形アクセントへは品詞によって偏りがあり、動詞・形容詞は現在平板型から中高型へ移るものが多いと指摘している。ところが、このような現象は連体形のところにも取り上げているが、形容詞全体的な傾向ではなく、特に終止形と基本形⁷⁾で目立つ現象として注目すべきことである。

3.2.2 連体形アクセント

[表2] 連体形アクセントの内訳

		アカイ (0)	オイシー (0)	サムイ (-2)	アオイ (-2)	オーキー (-2)
	D1	0	0	-2	-2	-2
	D2	0	-2	-2	-2	-2
	D3	0	0	-2	-2	-2
	D4	0	0/-2 ⁸⁾	-2	-2	-2
	D5	0	-2	-2	-2	-2
	D6	0	0	-2	-2	-2
	D7	0	-2/0	-2	-2	-2
	D8	-2	-2	-2	-2	-2
	D9	0	0	-2	-2	-2
	D10	0	-2	-2	-2	-2
	D11	0	0	-2	-2	-2
	D12	-3	0/-2	-3	-2	-4
計	地方	0(10)-2(1) -3(1)	0(7) -2(5)	-2(11) -3(1)	-2(12)	-2(11) -4(1)
	東京	0(14)	0(6) -2(8)	-2(14)	-2(14)	-2(14)

地方出身に目立つゆれのある語は記載してあるが、データには優勢なアクセントのみ数えた。[表1]と[表2]の大きな違いは「赤い」が終止形で使われたときは10/12名が東京アクセントからはずれた型である-2で発音したが、連体形で使われたときは鳥取県と大阪出身2名を除いて10名全部規則を守り、アクセントのゆれも見られなかった。

終止形と語形は同じでも連体形は東京出身の発音と同様で、まだ安定している状態にあると言えよう。これは、平板型形容詞が後ろに来る平板型名詞を修飾する場合、「あかいくつ（低高高高高）」のように後続される名詞の語頭の拍は一般的に高く発音されるからであろう。

これに對して、終止形が起伏型に多く変わる要因は、前で指摘された「多数形アクセントへの統合」の他、もう一つ考えられるのは、文の最後が平板型で終わる場合はまだ文が終わっていないということが感じられ、途中で下がり目を置きたいという心理的な要因が

7) 単獨で讀んだ場合

8) 0と-2とのゆれのある語で前の型が優勢なアクセントである(以下同じ)。

はたらいた可能性も排除できないだろう。

それから「おいしい」では一般的な東京アクセント(0)で発音された人は7名で、残り5名は-2であられ、東京出身よりかえって0の割合がやや高く調査された。これは3拍語である「赤い」とはその結果に若干の差をみせ、ゆれのある語を含めると連体形の「おいしい」の方にも起伏型が進んでいる⁹⁾と言えよう。

こうした現象は多拍語になってくると、平らに高く発音するには途中で下がり目を置きたいという発音の容易さへの欲求によるものと考えられる。「寒い、青い、大きい」は連体形でもD12の他は全員、規則通り発音され、何の変化も見られなかった。

3.2.3 ~ク活用形アクセント

[表3] ~ク活用形アクセントの内訳

		アカク (0)	オイシク (0)	サムク (-3)	アオク (-3)	オーキク (-4)
D1		0	0	-3	-2	-2/-4
D2		-2	-2	-2	-2	-4/-2
D3		0	-2	-3	-3	-4
D4		0/-3	0	-3	-3/0	-4
D5		-2	-2	-2	-2	-2
D6		0	0	-3	-3	-4
D7		0	0	-3	-3	-2
D8		0	0	-3	-3	-4
D9		-2	-2	-2	-2	-2
D10		0	0	-2	-2	-2
D11		0	-2	-2	-2	-2
D12		-2	0	-2	-2	-4
計	地方	0(8) -2(4)	0(7) -2(5)	-3(6) -2(6)	-3(5) -2(7)	-4(6) -2(6)
	東京	0(7) -2(7)	0(6) -2(8)	-3(7) -2(7)	-3(7) -2(6) 0(1)	-4(4) -2(6) -2(10)

まず、[表3]の全体的な傾向はアクセントの規則からはずれた型で発音した人が多いという点である。それから変化のパターンは、-2への変化が目立っている。つまり、0、-2形容詞とも「~ク」活用形では「ク」の直前拍にアクセントが置かれる傾向が強いということである。この傾向は東京出身の場合、70回分(5語×14名=70)の発音の内、38回分(54.3%)が見られたのに對して地方出身は60回分(5語×12名=60)の発音の内、28回分(46.7%)があらわれ、-2への変化は全国的な現象であると言えよう。

こういった変化の中で特に目立つのは、例えば「サムク」が「サムク」のように、アクセント核が1拍後ろにずれていることである。つまり、形容詞の語幹の最後の拍にアクセントが移り変わっているということである。このような変化は「大きければ(-6)、大きかった(-6)」を除

9) これらの傾向については今後拍数別に対象語を増やして検討する必要があると思われる。

けば、ここで取り上げたすべての活用形にあてはまると言えよう。

3.2.4 ～クテ活用形アクセント

[表4] ～クテ活用形アクセントの内訳

	アカクテ (-3)	オイシクテ (-3)	サムクテ (-4)	アオクテ (-4)	オーキクテ (-5)	
D1	-3	-3	-4	-3/-4	-5/-3	
D2	-3	-3	-3	-3	-5	
D3	-3	-3	-4	-3	-5	
D4	-4/-3	-5	-4	-4	-5/-3	
D5	-3	-2	-3	-3	-3	
D6	-3	-3/-5	-4	-4	-5	
D7	-3	-3	-3/-4	-4/-3	-3	
D8	-3	-5/-3	-4	-4	-5/-3	
D9	-3	-3	-3	-3	-3	
D10	-3	-3	-3	-3	-5	
D11	-3	-3	-3	-3/-4	-3	
D12	-3	-3	-3	-3	-5	
計	地方	-3(11) -4(1)	-3(9) -5(2) -1(1)	-4(5) -3(7)	-4(4) -3(8)	-5(8) -3(4)
	東京	-3(14)	-3(14)	-4(6) -3(8)	-4(5) -3(9)	-5(2) -3(12)

「赤い、おいしい」などの0形容詞に「～クテ」がつく場合は原則上、「ク」の直前拍にアクセントがくる。これは前に言及したように「ク」の直前拍にアクセントを置く傾向が強いということと関わりがあるのか、東京出身14名全員、原則通りにあらわれた。それから、地方出身も「赤くて」は愛知縣一人のみ頭高型で、「おいしくて」は3名が新しい型で、残りの人は原則通り発音され、比較的安定していた。

ところが、東京出身は「寒くて、青くて」では17/28名分(60.7%)のアクセントが-4から-3へ変わりつつあり、地方出身も15/24名分(62.5%)のアクセントが1拍後ろにずれる傾向があらわれた。

しかし「大きくて」は東京と地方出身の間にはかなりの差を見せていて、東京出身は規則を守った人はわずか2名しかなく残り12名(85.7%)は「キ」が無聲化する拍であるのにも関わらず、そこにアクセントを置く形を取っていたが、地方では原則通りのアクセントが8名、-3が4名しかいない。それに、ゆれのある語も3つあり、東京と地方との差が出てくるのは「オーキクテ」は「長母音」や「母音の無聲化¹⁰⁾」など音韻構造上、アクセントを置きにくい拍11)が續いているため、アクセントが安定していないからであろう。

10) 無聲化した母音が来る場合には原則上アクセント核は1拍前にずれるが、こうした拍が續く場合はその拍にアクセントが置かれるか、さらに1拍前にずれるときもある。例によっては1拍後ろにずれるときもある。

3.2.5 ～ケレバ活用形アクセント

[表5] ～ケレバ活用形アクセントの内訳

	アカケレバ (-4)	オイシケレバ (-4)	サムケレバ (-5)	アオケレバ (-5)	オーキケレバ (-6)	
D1	-4	-4/-6	-4/-5	-4	-6	
D2	-4	-4/-3	-4	-4	-6	
D3	-4	-6	-5	-5	-6	
D4	-5	-6	-5	-5/-4	-6	
D5	-4	-4	-4	-4	-6	
D6	-4	-4/-3	-5	-5	-6	
D7	-4	-4/-6	-4/-5	-4	-6/-4	
D8	-4/-3	-4	-5	-5/-4	-6	
D9	-4	-6/-4	-4	-4	-6	
D10	-4	-4	-4	-4	-6	
D11	-4	-6/-4	-5	-4	-6/-4	
D12	-4	-4/-3	-4	-5	-6	
計	地方	-4(11) -5(1)	-4(8) -6(4)	-5(5) -4(7)	-5(5) -4(7)	-6(12)
	東京	-4(14)	-4(8) -6(6)	-5(6) -4(8)	-5(6) -4(8)	-6(14)

[表5]の「赤ければ」のアクセントは「赤くて」と同様に安定していて11/12名(地方)、14名全員(東京)規則通りにあらわれたが、「おいしければ」は4/12名(地方)、6/14名(東京)が規則からずれた型である-6(頭高型)で発音されていた。それに東京・地方ともゆれが目立っており、これは「アカケレバ」と「オイシケレバ」音韻構造が異なり、「オイシケレバ」では前にも述べたようにアクセントを置きにくい二重母音や無聲化した母音が来たため、アクセントが安定せず、変化やゆれが見られたと思われる。

「寒ければ、青ければ」では「～ク・～クテ」と同様にアクセント核が1拍後ろにずれる現象が目立つ。地方は14/24名分(58.3%)、東京は16/28名分(57.1%)が-5から-4へ移り変わっている。「大きければ」は前の「大きく、大きくて」とは結果が異なり、ゆれが見られるものの、アクセントが非常に安定していて、地方・東京とも全員新しい型はあらわれず、-6(頭高型)で発音されていた。

3.2.6 ～カッタ活用形アクセント

11) 東京アクセントでは「ン、ッ、ー」など特殊伯にはアクセント核が置かれない原則がある。

[表6] ～カッタ活用形アクセントの内訳

	アカッタ (-4)	オイシカッタ (-4)	サムカッタ (-5)	アオカッタ (-5)	オーキカッタ (-6)	
D1	-4	-4/-6	-5	-4	-6	
D2	-4	-4/-6	-4	-4	-6/-4	
D3	-4	-6	-5	-5	-6	
D4	-4	-6	-5	-5	-6	
D5	-4	-4	-4	-4	-6	
D6	-4	-4/-3	-5	-5	-6	
D7	-4	-4	-4/-5	-4	-6/-3	
D8	-4	-6/-4	-5	-5/-4	-6/-3	
D9	-4	-4	-4	-4	-6	
D10	-4	-4	-4	-5	-4/-6	
D11	-4	-4	-4	-4	-6	
D12	-4	-4	-4/-5	-5	-6	
計	地方	-4(12) -6(3)	-4(9) -4(7)	-5(5) -4(7)	-5(6) -4(6)	-6(11) -4(1)
	東京	-4(14)	-4(11) -6(3)	-5(6) -4(8)	-5(5) -4(9)	-6(14)

「～ケレバ」と「～カッタ」のアクセントは規則としては同一であって、0形容詞は「ければ」「かった」の前の拍に、-2形容詞は前の前の拍にアクセントが置かれる。ところが、「赤かった」を除いて残りの語では変化が起き、「オイシカッタ(-6)」で発音した人が東京・地方とも3名ずつあられ、それに音韻構造上アクセントを置きにくい拍が続くため、約30%のひとにゆれが見られた。

また「サムカッタ(-4)」「アオカッタ(-4)」で発音した人は地方13/24名分(54.2%)、東京17/28名分(60.7%)があらわれ、原則通り発音した人を上回っていることがわかる。それから「大きかった」はゆれがあるものの、地方の1名のみ-4に、残り11名は原則通り-6であられた。

3.3 年齢別変化した語の内訳

3.3.1 平板型

[表7] 原則からずれた型の年齢別内訳 (平板型)

活用形 \ 年齢別	D1～D6(T1～T7)	D7～D12(T8～T14)	平均(%)
終止形	91.7(100)	91.7(78.6)	91.7(89.3)
連体形	16.7(42.9)	41.7(14.3)	29.2(28.6)
～ク	41.7(78.6)	33.3(28.6)	37.5(53.6)
～クテ	25.0(0)	8.3(0)	16.7(0)
～ケレバ	25.0(28.6)	16.7(14.3)	20.9(21.4)
～カッタ	16.7(14.3)	8.3(7.1)	12.5(10.7)
平均(%)	36.1(44.1)	33.3(23.8)	34.7(34.0)

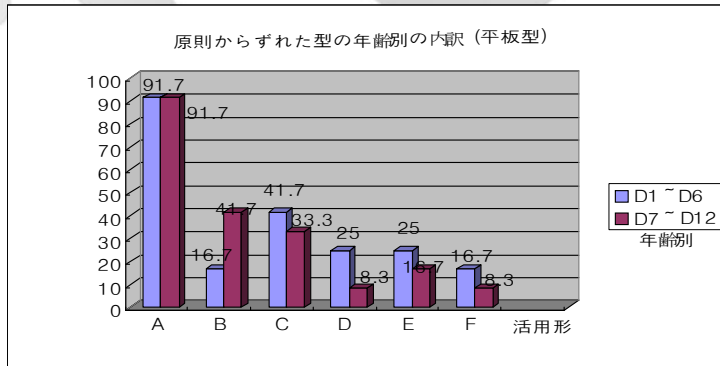
東京出身の形容詞アクセント調査では年齢による差がかなり大きかった。地方にもこのような年齢差があるのか、[表7][図1][図2]を見ながら検討していきたい。まず[図1]では地方の平板型発音の中で原則からずれた型の年齢差をあらわした。()の数字は東京出身の変化した語の割合を表わしている。

D1~D6は20代で、D7~D12は30・40代となっているが、活用形別に分けてみると、終止形においては20代と30・40代との差がなく、両方とも91.7%が平板型から起伏型への変化を見せ、年齢との関わりがなかった。ところが、東京では100%:78.6%で20代の変化が多い。

それから、連体形において、地方では16.7%:41.7%で20代より30・40代のほうが変化の割合が高くあらわれているのに対して東京は42.9%:14.3%で20代のほうがかえって、変化が多く見られている。「~ク」活用形においては地方・東京とも20代のほうが変化が目立っているが、特に東京は78.6%:28.6%で、かなり大きな年齢差を見せた。

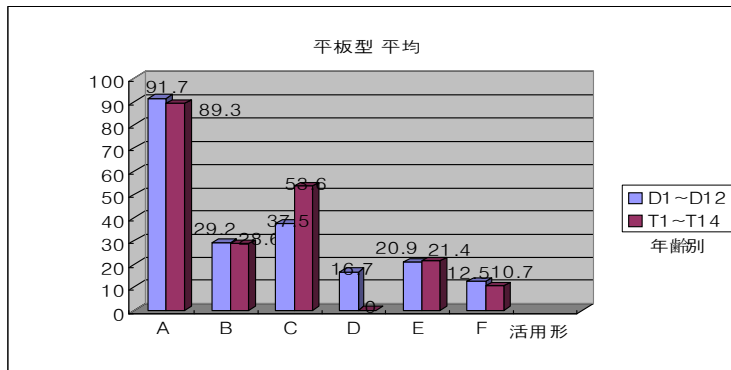
また「~ケレバ、~カット」でも地方・東京とも20代のほうに変化が多い。ここで注目すべきことは、地方・東京の平板型変化の平均値は34.7%:34.0%で、それほど差は見られなかったが、東京出身は20代の方に変化が目立ち、大きな年齢差を見せている反面、地方は年齢差が活用形によってちがっているものの、平均値ではそれほど年齢差が見られなかったことである。

[図1] 地方出身の平板型の年齢差



A：終止形 B：連体形 C：~ク D：~クテ E：~ケレバ F：~カット

[図2] 地方と東京出身の変化した語(平板型)の比較



A: 終止形 B: 連体形 C: ~ク D: ~クテ E: ~ケレバ F: ~カッタ

3.3.2 起伏型

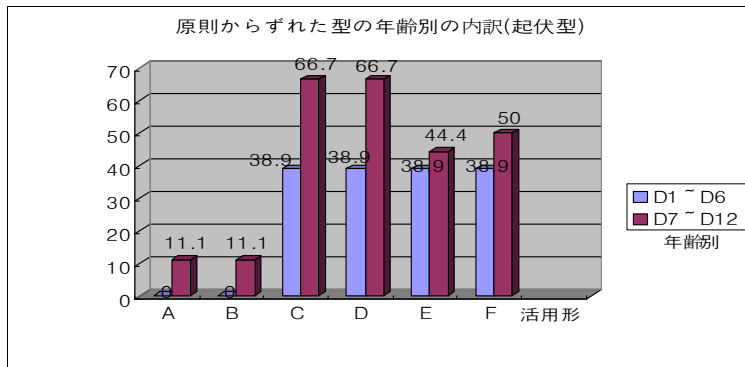
[表8] 原則からずれた型の年齢別内訳 (起伏型)

活用形 \ 年齢別	D1~D6(T1~T7)	D7~D12(T8~T14)	平均(%)
終止形	0(0)	11.1(0)	5.6(0)
連体形	0(0)	11.1(0)	5.6(0)
~ク	38.9(81.0)	66.7(33.3)	52.8(57.1)
~クテ	38.9(95.2)	66.7(42.9)	52.8(69.0)
~ケレバ	33.3(52.4)	44.4(23.8)	38.9(38.1)
~カッタ	27.8(57.1)	50.0(23.8)	38.9(40.5)
平均(%)	23.2(47.6)	41.7(20.6)	32.4(34.1)

[表8]を見ると、平板型と違って起伏型では終止形、連体形とも変化した語はほとんど見られなかった。ところが、「~ク、~クテ」では変化が目立っているものの、東京と地方では年齢差が逆のパターンとなっていた。その内訳をみると、地方の変化の割合は38.9%:66.7%で、30・40代が20代を大きく上回っている反面、東京では「~ク」は81.0%:33.3%、「~クテ」は95.2%:42.9%で20代が30・40代を倍以上、上回っている。「~ケレバ・~カッタ」でも同様なパターンが見られ、起伏型では全体的に東京では20代に変化が目立っているのに対して地方では30・40代のほうに目立つ。

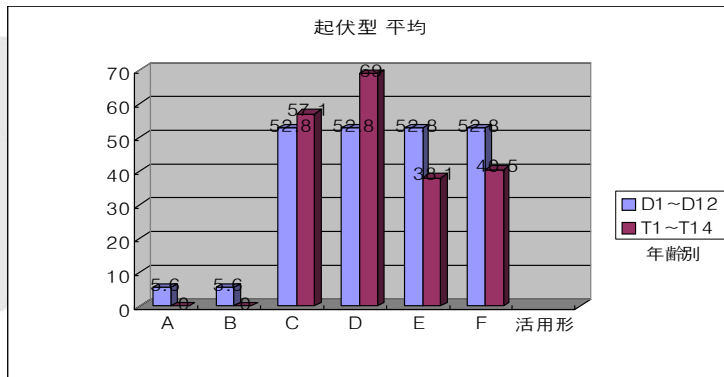
このように変化した語の中で平板型より起伏型に年齢差が大きく見られ、年齢別(20代:30・40代)の平均値の割合は地方では23.2%:41.7%で東京では47.6%:20.6%となっていた。今回はインフォーマントを20代から40代までにしたが、今後もう少し年齢層を幅広くして調査を行なうべきであろう。

[図3] 地方出身の起伏型の年齢差



A：終止形 B：連体形 C：～ク D：～クテ E：～ケレバ F：～カッタ

[図4] 地方と東京出身の変化した語(起伏型)の比較



A：終止形 B：連体形 C：～ク D：～クテ E：～ケレバ F：～カッタ

4. おわりに

東京出身をインフォーマントとして形容詞アクセントを活用形別に調査した前回の発表においては、平板型の起伏型への変化や起伏型の「～ク・ケレバ」などの活用形アクセントが1拍後ろにずれる現象、つまり形容詞の語幹の最後の拍にアクセントが移り変わっているということである。それからこうした変化は年が若いほど多く見られ、その年齢差を見ることができた。こうした現象は、果たして東京出身に限って起こる現象なのかそれとも全国的現象なのかが課題として残され、今回はその引き継ぎで、前回と同様な方法で地方出身を中心に調査を行なった。その結果は次のようである。

第一は、平板型「赤い、おいしい」の起伏型への変化は終止形に目立ち、91.7%もあらわれ東京の89.3%より若干上回っている。その反面、連体形においては地方・東京とも30%以下の変化を見せ、また単独の場合は終止形と全く同一な結果が得られた。こうした変化の要因は「多数形アクセントへの統合」によるものと考えられ、これはまた最近名詞が平板型へ変化しつつあることとは逆のパターンでもある。

第二は、起伏型形容詞の「～ク・～クテ・～ケレバ・カタ」活用形においては、アクセント核が1拍後ろにずれる現象(地方57.3%：東京56.3%)が目立っていることである。つまり、これは頭高型から中高型への変化を意味するが、特に形容詞に少ない頭高型で発音するより、馴染みのある中高型で発音したほうが無難であるという意識から生じたものではないかということである。もう一つは「アクセントの勢力の移り変わり」が変化に拍車をかけたものではないか、ということが予想されることである。

第三は、東京出身は平板型・起伏型形容詞とも20代(45.9%)に変化が目立ち、30・40代(22.1%)との年齢差が大きい。が、地方出身は平板型では年齢差はあまりなく、起伏型では20代(23.2%)より30・40代(41.7%)のほうに変化が目立っている。平板型、起伏型の平均値も29.7%：37.5%で、これは東京出身とは対照的で30・40代にアクセントの移りが多く見られた。

第四は、「オーキケレバ、オーキカタ」のように長音や無聲化した母音など、アクセントの置きにくい拍が續く「音韻構造」となっている語は、年齢と関係なくゆれば若干あるものの、アクセントの動きがない安定型アクセントを保っている点などがあげられる。

いずれにせよ、今回の調査であらわれた現象の中で、とりわけ<平板型形容詞の起伏型への変化>と<起伏型形容詞の活用形アクセントが1拍後ろにずれる現象>などは全国的現象としてあらわれた。このことは単に一時的な現象なのか、日本語の共通語のアクセント体系に大きな変動が起きたことを示すものか、これを実証的に説明することは今のところむずかしいが、こうした現象が非常に目立っていることは確かであろう。ともあれ、今回の発表の問題点と課題は調査の対象語や対象者をもう少し増やしてデータの正確性を図るべきで、またインフォーマントの問題であるが、対象者12名のうち5名は現在韓国に滞在しており、アクセントが若干変わった可能性も排除できない。今後、こうしたことも含めて、形容詞アクセントの変化においてより幅広い研究を進めていく必要があると考えられる。

【参考文献】

- ・ 李香蘭(1996)「平板化する日本語のアクセント」『日本文化學報2』韓国日本文化學會 pp.51-69
- ・ 李香蘭(2000)「日本語における外來語のアクセントの最近50年間の変化」『日本語學研究』第2輯 韓国日本語學會, pp.221-231
- ・ 李香蘭(2004)「東京語における形容詞のアクセントの変化」第20回韓国日本語文學會發表論文 (2004.10.9)
- ・ 秋永一枝(2002)「東京語の發音とゆれ」『現代日本語講座第3巻發音』明治書院, pp.40-58
- ・ 佐藤亮一(1990)「現代東京語のアクセント-年齢差および辭典との差を中心に-」『國語論究2』明治書院, pp.204-239
- ・ 田代晃二(1988)『美しい日本語の發音』創元社, pp.40-64
- ・ 陣内正敬(1997)「平板化アクセントの意味するもの」『月刊日本語3号』アルク, p.32-33
- ・ 馬瀬良雄・佐藤亮一(1985)『東京語アクセント資料』科研費資料集, pp.1-1028(形容詞)
- ・ 最上勝也(1984)「変りつつある共通語のアクセント(1)デンシャ(電車)からデンシャへ -アクセントの平板化現象-」『NHK放送研究と調査』pp.48-55
- ・ 最上勝也(1987)「平らになる外來語アクセント」『NHK放送研究と調査』pp.36-41
- ・ NHK編(1999)『日本語發音辭典』NHK出版, 付録, pp.202-207

要 旨

前回、課題として残された形容詞アクセントの変化が、果たして東京出身に限って起こる現象なのか、それとも全国的現象なのかを調べる目的で、今回は地方出身を対象として形容詞アクセントの変化の様相やその要因、年齢差を調べた。その結果は次のようである。

第一は、平板型「赤い、おいしい」の起伏型への変化は終止形に目立ち、91.7%もあられ東京の89.3%より若干上回っている。その反面、連体形においては地方・東京とも30%以下の変化を見せ、また単独の場合は終止形と全く同一な結果が得られた。こうした変化の要因は「多数形アクセントへの統合」によるものと考えられ、これはまた最近名詞が平板型へ変化しつつあることとは逆のパターンでもある。

第二は、起伏型形容詞の「〜ク・〜クテ・〜ケレバ・カッタ」活用形においては、アクセント核が1拍後ろにずれる現象(地方57.3%：東京56.3%)が目立っていることである。

第三は、東京出身は若いほど変化が目立ち、年齢差が明確に現れたが、地方出身はそれほどの年齢差は見られなかった。

第四は、「オーキケレバ、オーキカッタ」のように長音や無聲化した母音など、アクセントの置きにくい拍が續く「音韻構造」となっている語は、年齢と関係なくゆれば若干あるものの、アクセントの動きがない安定型アクセントを保っている点などがあげられる。

いずれにせよ、今回の調査であらわれた現象の中で、とりわけ<平板型形容詞の起伏型への変化>と<起伏型形容詞の活用形アクセントが1拍後ろにずれる現象>などは全国的現象としてあらわれた。

キーワード：起伏型への変化、年齢差、多数形アクセントへの統合、音韻構造、後ろにずれる現象、全国的現象

투 고 : 2004. 11. 30
1차 심사 : 2004. 12. 11
2차 심사 : 2005. 1. 4

住 所 : (305-330) 대전시 유성구 지족동877 열매마을 아파트 510-1902
電 話 : 063-850-6524(학교) 042-471-2275(집) / 011-9816-6559
e-mail : ran96@wonkwang.ac.kr